

## 付帯資料 4 (←P20)

「K子のこと（全国国立重症心身障害児（者）収容施設児童指導員連絡協議会東北支部会員文集：『こどもと私』，創刊号，2～4，1971）」より。

### K 子 の こ と

西多賀病院 阿 部 幸 泰

昭和46年3月19日西多賀ベツトスクールの小・中学校の卒業式が，行なわれた。この卒業生に混って，重障児病棟のK子も賞状を受けた。目にあふれる涙一杯とともに。

K子の両親は，死亡しているため詳しいアナムネーゼはない。出生間もなくから，おばに育てられ，（K子は，このことは知っており，おばを，母と呼ぶ）小学4年まで普通小学校に通っていたが，その頃の傷がもとで両下肢，左上肢がマヒし，股関節，膝関節が曲らない姿勢で，中度の難聴を伴ない，又言語障害がある状態で，4年前当院に入所してきた。

入所時，K子は職員にはむかった。まず自分がなぜ「こんなバカな子（周りの重障児を，こうK子はいった）といっしょにいなければならないのか」という気持が強く，この事が全ての面で職員をこまらせた。知能，精神が正常に近いだけに，尚のことであつたらう。言語障害故か，職員とも話そうとせず，筆談でしか応じなかった。時にはすねたり，介助に抵抗したり，職員のとまどいは増すばかりであり，なぜ，K子が重障児なのか？ 誰もが抱く疑問であつた。

しかし，K子も社会的重障児そのものといえるかもしれない。重障児という名が，従来の児童福祉施設で収容されない子供を意味する以上……。K子にとって，西多賀病院重障児病棟以外に行く所があつたであらうか。

職員は，K子がなぜ重障児なのかという詮策をさておき，それよりも現に目の前にいるK子を，K子にふさわしい生き方を……と考え始めた。

私は指導員として、特にそのことを決心した。そして、K子にきびしい態度で接した。私の手の甲は、K子のつめ後で傷つくこともしばしばだった。言葉で十分に自分の気持を説明出来ぬK子は、感情のいら立ち故に行動にでたのかもしれない。私は、それがわかるだけにさらに、きびしい態度を続けた。私への抵抗だけであってくれるように……と。なぜなら、もし、すべての職員へ同じ態度を、くりかえすなら、病棟としてK子をなぜ入れた？ という問題に発展し、問題行動故に退所という問題に（誰がみても、一般概念としての重障児と思えぬK子だけに）発展することを恐れた。なぜなら、K子をこの重障児施設がボイコットすれば、従来の児童福祉施設と同じ差別をくり返すことになり、そうしたくないという気持が、私の内に強かった。

こう考えてくると、私はいくら抵抗してもK子自身は、誰かに日常生活の手助けを受けぬ限り生きていけないなら、まずこの病棟で生きていく、生活していくことを、K子に考えてもらいたかった。自分の人生を自分で受けとめてもらいたかった。そして自らが、自らの手で今ある現状の中で一杯生きていく方法をみつけて欲しかった。そのためには、最大限の応援をしよう。それにはまず、職員に心開いて話してくれることが第一であり、私はK子にこのことを理解させるべく、時には、きびしすぎる態度でのぞんだ。

こうした私や、職員の努力の中で、K子は日に日に、心をやわらげていってくれた。まず補聴器着用により、筆談より、会話が多くなっていった（補聴器着用により、最初は、ずいぶん抵抗したが……）。友達（同じ年令に近い）を欲していると知り、私はあるボランティアの女子大生に、それをたのんだ。又職員内でも、じっくり相談したいと望んでいた時、保母とK子の交換日記が始まった。「こんなバカな子」といっていた周りの子供の世話もみてるようになった。右上肢のみ自由という制約の中で……。

自らが、この病棟の中で生活を豊かにしていこうとすることが、K子の意識するしないにかかわらず行動として表われてきた。

私のK子への初期の目標は、達せられた。こうした中で、私を始め職員が次に

考えねばならぬことは、学校教育を多くの制約があろうと、受けさせたいということであった。

幸い、当院にはベツトスクールがあった。教師の方々も、とまどいがあってであろうが、快くひきうけてくれた。しかし、ここで「重障児」というどうしようもない壁にぶつかった。学籍の問題である。IQ35以下、重障児施設入所のパスポートにもなっている就学免除という条件。もしK子を学籍に入れると重障児施設から退所という問題に発展しかねない。では他に、適当な施設があるかないからこそ、K子は重障児といわれここに入ってきたのではないか！

職員、教師等皆が、一人の人間の幸せを願い、考えれば考えるほど、K子を又退所という問題におし込むかもしれぬという矛盾。いいようもなく腹立だしくなった。これが福祉か？ これが教育か？ いくら考えても、いい方法はなく、退所という問題に発展する危険をさけ、聴講生という型をとった。本来小学4年から始めたかったが、17才という年令と、他の生徒の年令の差もあり、教師からの申し入れで中学1年生になった。K子は、さしてこのことは気にしない様子が私達の心のやすらぎだった。K子は通学を楽しみにし、教師をしたった。本当に本当にあっという間に3年間がすぎた。

3月19日K子は学籍に入っていなかったもので、卒業証書をもらえなかった代わりに、校長名で賞状が渡された。K子は式の途中から泣きじゃくっていた。式に出席し遠くからながめていた私も、このK子の姿に接した時、胸のこみ上げるのをおぼえた。

長い廊下を式場から、病棟まで。K子の乗るストレッチャーをおして帰る時間が、長い長い時間に感じた。入所時とくらべ、すなおになった彼女、今は誰とも話せる彼女、よくぞここまで……というK子への感謝が私の心にわいてきた。

でもK子の涙は、何を意味していたのであろうか？ 感激の涙だったのか、それとも、自分が重障児病棟に収容されているというだけで、卒業証書をもらえなかったことへの私達への怒り故か？ 私は、今もってこのことを問い正す勇気を持たない。皆は感激から……という。でも私は指導員として、この疑問は、K子

がどうであれ持ち続けたい。

そして又、私はK子の通学ということから、仕事として与えられた条件以上に一人の子どもの幸せのためにと努力をはらって下さった人々（K子の通学の送りむかえをした職員、K子を学力のギャップにもかかわらず、指導して下さった教師の方々等）の行為の尊さから、ここに真の福祉の源があることを教えられた。

K子は、今、車イスを自分で動かせるようになるためへの、訓練に励んでいる。今後のK子の、生活をどうしていくか、色々の方法手段が、今病棟内で、家族や、本人の意見も聞いて、主治医を中心に検討していこうとしている。私も、K子がこの病棟にいる限り、K子への私の指導員としての仕事は、さらにこれからという気が強くする。

私が、K子のケースから強く感じることは、形式や、概念に指導員が自己規制することなく、一つ一つのケースを、子どもの側に立って、職員や、社会資源の協力を得ながら考えていく内に、又実績をつみ積ねていく内に、重障児と呼ばれる子ども等の幸せを捜していくカギがあり、又指導員としてのやりがいがあるのでないかということであった。

（尚、K子さんは、特製の車イスを片手だけで自由に操作できるようにもなり、昭和50年11月仙台市内に新しくできた身体障害者療護施設へ移り現在に至っています。時々自分のすごした重障児病棟へ元気な顔をみせ、子供たちにやさしいことばをかけてくれます。）